

戦略バランス特集
中国の ABM 計画が全世界の戦略バランスにもたらす影響
漢和防務評論 20150805

阿部信行

(訳者コメント)

天津の化学工場大爆発事件によって、中国は軍事パレードを中止するかと思いましたが、事件などなかったように国威発揚のための軍事パレードを行いました。これは中国にとって極めて大きなマイナスイメージを与えたイベントでした。この状況判断ができないところが中国の弱点でしょうね。

漢和防務評論誌は、中国の ABM 技術開発について紹介しています。著者の平可夫氏は、米国の ABM 条約脱退によって、中国の ABM 技術開発に歯止めがかからなくなったと述べ、極めて残念な行為であるとしています。中国が ABM 技術を開発した際には、世界の戦略バランスが大きく変化する可能性があるとして述べています。

平可夫

米国が ABM 条約 (ANTI-BALLISTIC MISSILE TREATY) を脱退したことによる報いが来た。KDR は、中国の ABM 開発に就いて反復調査し、慎重に取材を重ねた結果、中国が第 13 次 5 ヶ年計画期間中に、ABM を開発し配備するとの情報を得た。第一は、すでに事業化された X バンド大型フェーズド・アレイ・レーダーと発射可能な 2 種類の型がある 5 個以上のミサイル早期警戒衛星である。さらに 3 種類の迎撃ミサイルがあり、レーザーによる迎撃技術も開発されようとしている。これらの計画は、明らかに中距離弾道ミサイルに対処するものであるが、米国もロシアも類似のミサイルを保有していない。しかし中国はすでに中距離弾道ミサイル迎撃実験を行っており、コルラに地上レーダー等を設置している。中国が開発する新たな ABM 計画の最終目的は、明らかに米国の小規模 ICBM 攻撃に対処するためであり、米国による小規模核戦争発動の企図を阻止するためである。これらの基本思想は、米国が開発中の”本土ミサイル防衛計画”(NMD 現在は GBI に改称)と同じである。米ソ両国間で全面核戦争が発生し ICBM が大量に発射される事態となった場合、双方が打撃を受けるだけであることは、すでに 1970 年代から両国とも十分理解していた。しかし核大国は、数個の ICBM による核攻撃(核による威嚇)をもって相手に戦争の意図を放棄させようとする作戦思想は放棄していない。すなわち有限核戦争の考え方であり、今まで核大国の間でこの思想が完全に排除されたことはなかった。これが 1972 年に署名された ABM 条約の根拠である。この条約の実際上の作用は、双方の有限核戦争の能力を制約することにある。した

がって条約は、双方は1つの地域に100個以上の迎撃兵器を配備してはならないと規定している。

この条約は、極めて価値のある歴史的な条約であるとKDRは考える。今後、各核大国は、この条約を核軍縮及びABMに関する技術開発を制限するための基本法にしなければならない。残念ながら、米国はGBI計画により2001年に条約から脱退した。この行為は、国際的に悪い先例を作ったと考える。国際的な信用は何処へ行ったのであろうか？したがって、もはや如何なる国もABMの技術開発に関し、如何なる国際条約の制約も受けることが無くなった。

米国のGBI計画の現在の状況は、明らかになっている。實際上すでに停滞状況にある。その理由の第一は、財政予算不足である。第二は技術の未成熟であり、何度もテストに失敗している。従って、今のところ、米国は、2箇所、すなわちアラスカに配備された21発とカリフォルニア州に配備された3発だけで、概ね5発前後の来襲するICBMに対応出来る態勢にある。主な目標対象は当然中国からのICBMである。この点は、カリフォルニア州に配備されたGBIの動向から分かる。ロシアからのICBMが米国を攻撃する場合は、通常北極軌道を通る。

海南島に配備された潜水艦発射JL-2A型SLBMが米国を攻撃する場合は、太平洋軌道を通る。

米国のGBI計画は、海外基地への配備問題が生起している。したがってオバマは、3段階式のGBI計画を2段階に減らした。ポーランドへの配備はロシアの反対で未実施である。

中国のABM計画は、同様に国際的な戦略バランスに重大な影響を与える。KDRの予測では、もし中国のABM計画が現実となった場合、今後10年、宇宙の軍備競争及びABM技術開発競争は、米露の間のほか、英国、フランスも参入してくる。なぜか？

本誌は、中国軍の弾道ミサイル迎撃技術開発の情報を把握しているが、以下に述べる細部に就いては不明である。

中国は、現在どの程度の数のICBMを保有しているのか？ 保有核弾頭の数？この点を把握することは極めて重要である。数が多ければ多いほど、ABM技術が向上すればするほど、戦略的優位に立てるからである。そうなれば、米国としてはGBIシステムを更に大がかりなものにする必要に迫られる可能性がある。もし中国のICBM弾頭の数に英国やフランスと同レベルであるとしたら、おおよそ400個前後である。英仏の核弾頭数はすでに公表されている。

中国がABM技術を保有することになれば、英仏に対しては戦略的優位に立つことが出来る。両者が対峙した場合、双方が同じ性能の”矛”を保有しているにもかかわらず、一方は”楯”を持ち、一方は持たないことになるからだ。どちらが戦略的（戦術的）に優位に立てるかは疑問の余地が無い。

第二砲兵がDF-31A型ICBMの開発を開始して以来、軍内部では”全地球への火

力到達”を目標に掲げていた。このことは中国の ICBM が地球上のあらゆる国を攻撃できるようにすることを意味する。

實際上、094 型戦略核潜水艦 (SSBN) の数量増加 (現在は 3 艘のはずであるが、今後さらに 096 型 SSBN が建造されるであろう)、その上増えつつある ICBM の数及び H-6K/CJ-10 巡航ミサイルの数を考慮すると、中国の 4 つの軍種が保有する長距離核打撃弾頭数量は、英仏と米露の中間ぐらいにあると思われる。300 乃至 400 個だけのはずがない。しかも英仏の核弾頭数は固定であり、発射プラットフォームも SSBN が 5 艘である。これは今後削減される可能性はあっても増加することは無い。

中国が 13 次 5 ヶ年計画で建設しようとしている ABM システムは、どの程度の地域を守ろうとしているのだろうか？北京のみか？上海や三峡ダムのようなその他の重要戦略目標を含めるのか？これらの状況が分かれば、中国がどの程度の数の迎撃ミサイル基地を建設しようとしているのかが分かる。

どこに建設されるか？上海等、沿海地区の大都市を防護しようとするれば、迎撃ミサイルは沿海地区に配備する必要がある。これは米国がカリフォルニア州に GBI を配備している状況と似てくる。

中国が米国発北極軌道経由のミサイルから自国を防衛するためには、領土の東北及び西北の最北端に X バンドレーダー及び迎撃ミサイルを配備する可能性がある。この X バンドレーダーは、米国からの ICBM を探知できるだけでなく、シベリアの SS-25/27 発射基地の一切の活動を監視することが出来る。

ロシアは如何なる反応を示すだろうか？この点は、あまり問題にならない。ロシア極東に建設されたフェーズド・アレイ・レーダーは、中国の第二砲兵試験基地を監視しているからである。

中国の X バンド大型フェーズド・アレイ・レーダーは、上海や沿海大都市を防護するため、陸地だけでなく、米国のように海上にも配置されるのだろうか？もし海上基地の X バンド大型フェーズド・アレイ・レーダーが開発されたならば、中国海軍は第一列島線を突破した海上基地による ABM システムを建設することを意味する。海外基地は建設されるだろうか？特に太平洋国家に。これは最も重要である。ロシア及び英仏は如何なる反応を示すであろうか？

ロシアと中国には戦略的な信頼関係が存在する。近い将来は、ロシア政治家は、中国の ABM システムがロシアに対処するためとは考えないであろう。しかしロシアの軍人はそのようには考えていない。中国は、ABM システムの建設によって、小規模核戦争を抑制することが出来る。客観的には米国、英仏に対してだけでなく、長年の核の宿敵ロシアに対しても、である。

また米国が開発中の GBI 技術に就いても、一旦ロシア経済が強大になった場合は、ロシアは戦略兵器に多くの予算を投入できるようになり、ABM システムの再構築を始めるであろう。現在、対外的には、ロシアの ICBM 対処手段は首都防衛に限定されている。ロシアの ICBM 対処迎撃ミサイルは常に技術的改善がなされている。

KDR としてはやはり英仏の姿勢に注目せざるを得ない。その理由は、国際的な共通認識として、中国の長距離核打撃能力は英仏と同一水準にあると見られていたからである。

戦略バランスの観点から言えば、一旦中国が ABM 技術を開発したならば、英仏の核打撃能力が中国に対し劣勢となるからである。軍人はただそのことだけを問題にしている。外交、政治の問題の多くは、政治家が考慮する問題である。英仏は、ABM 技術を自ら開発することになるのだろうか？

KDR は次のように考える。中国が ABM 技術を開発するにしたがって：米国はさらに大きな GBI 迎撃システムを建設する可能性がある。米国にとって”戦略バランス”は存在しない。もし中米双方が自らの GBI システムを建設することによって、理論的に相手の”5 発”の ICBM を迎撃出来る能力を保有したとしても、米国にとって、中国に対する”5 発の核威嚇”能力などは意味がない。米国の対応措置は、

1. 中国向け核弾頭の数を増加する。

この点は考えられない。なぜなら米国は十分な核弾頭を保有しているからである。

2. GBI の数を増し、中国の ICBM を迎撃できる能力を常に向上する。10 発、30 発、更に 100 発と、戦略優勢を確立するまで数を増やす。

現在の技術開発状況から見て、米中の ABM 技術開発は、必ずしも核攻撃だけを対象にしていない。KDR が発見した第二砲兵の文献によると、この 10 年来、高精度の ICBM が携行する通常弾頭を前提とした ICBM 攻撃の実行可能性を研究していた。しかも中国側は米国の類似領域の言論、理論研究及び実戦的な技術試験に強い関心を示していた。ABM は、当然通常弾頭の ICBM を攻撃できる。

最後の一点は、中国の ABM システムは、最終的にどの程度の規模になるかである。どの程度の数の迎撃ミサイルを配備するか？

初期段階には、例えば第 13 次 5 ヶ年計画では、技術開発、ICBM 迎撃試験、X バンドレーダーの建設、ミサイル早期警戒衛星の打ち上げだけが行われるはずである。実際の配備は、第 14 次 5 ヶ年計画期間中に開始される可能性がある。配備方式は当然米国の GBI に似て小から大へ、段階的に行われる。

米国の GBI 建設進捗状況について、はっきりしていることは、米国は資金が欠乏していることである。一方の中国は軍事費が潤沢で ABM の開発、配備の速度は速い。これと同時に ICBM と核弾頭の数が増加し核攻撃能力向上と ABM 能力向上が並行して進められることである。

インドの状況も注意すべきである。現在インドは、主としてパキスタンに対抗するための中距離弾道ミサイル迎撃技術を開発中である。中国から飛来するのは、主として中距離弾道ミサイルである。したがってインドは、射程 5000 KM の AGRI-5

の開発以降、中国を攻撃目標としている。一旦数量有限の AGRI-5 による対中国核威嚇が無効になった場合は、インドは AGRI-6 の配備の規模を拡大せざるを得なくなる可能性がある。そして新たな対中戦略バランスを図ろうとするであろう。

以上